

地域は舞台

能勢 浄瑠璃の里
(大阪府豊能郡能勢町)

歴史を受け継ぎ 文化を生み出す

伝統を創造的に

革新しながら受け継ぐ

町ぐるみの浄瑠璃の里づくり。

目指すは日本一のアマチュア!

能勢 浄瑠璃の里

語りだけの素浄瑠璃の伝統が息づく能勢町。独特の「おやじ」制度のもと、人口1万人あまりの町に、200人を超える太夫が暮らす。平成になって新たに人形遣いが加わり、町立の「浄るりシアター」の座付き劇団として人形浄瑠璃を上演する「鹿角座(ろっかくざ)」を結成。子どもから中高年の住民まで参加するまちぐるみの浄瑠璃の里づくり。2007年サントリー地域文化賞受賞。

浄るりシアター

〒563-0341 大阪府豊能郡能勢町宿野30

TEL : 072-734-3241

E-mail : jyoruri@town.nose.osaka.jp

http://jyoruri.jp/

能勢町は全国に類を觀ない浄瑠璃の里である。人口一万一千五百人の町内には四つの浄瑠璃の流派があり、二百名もの太夫を抱える。多くの人々がオーディエンスとして浄瑠璃を楽しむにとどまらず、自らが演じる側に立ち芸を磨く。「浄瑠璃のひとつも語れんよなやつには嫁にはやれん」そんな会話すら交わされていたというほど、この地域社会には浄瑠璃が浸透している。大阪最北端の町、地図で見ると大阪府のてっぺんやや左寄りにポコッと突き出た部分が、豊能郡能勢町だ。アクセスは伊丹空港から車で北へ四十分。なだらかな山々の斜面に棚田が広がる美しい里山である。古くは丹波と大阪とを結ぶ街道筋の集落であった。

今からおよそ二百年前、江戸時代・文化年間のこと、杉村量輔という村人が、大阪で当時流行していた浄瑠璃の

竹本弥太夫の元に弟子入りした。修行を積んだ杉村が能勢へ戻り竹本文太夫の名で活動を始めると、彼に弟子入りしたり、同じように大阪で修行を積む者が次々に現れ、地域に浄瑠璃を楽しむ文化が広まった。当時の能勢では住民の多くが農民であったため、農閑期や雨天の日には、皆集まって浄瑠璃の芸を競い合ったという。これが現代まで脈々と続く、能勢の浄瑠璃文化の始まりである。

能勢の浄瑠璃界には江戸時代から続く「おやじ制度」と呼ばれる独特なし



「日本の棚田百選」にも選ばれた長谷(ながたに)の棚田。能勢町では米、栗、菊炭、松茸・椎茸などが特産品となっている。



きたりがある。地域には現在、竹本文太夫派、竹本井筒太夫派、竹本中美太夫派、竹本東寿太夫派の四つの流派があるが、各派の家元を門人達は敬意をこめておやじと呼ぶ。



(左) 現在のおやじ、第38代竹本文太夫こと大植元信さんと第44代竹本井筒太夫こと岡本勲さん。(右)「絵本太功記」の武智光秀。

おやじは世襲制ではない。門人の中から選出され、四、五年サイクルで世代交代していく。おやじに選ばれる資格条件として、「稽古上げ」といって何人かの弟子を育て上げた実績が求められるため、ひとりのおやじが誕生する時には、同時に数名の弟子が育っている。能勢の浄瑠璃文化が永きに渡って続いた背景には、必然的に後継者が増える、おやじ制度も大きく貢献しているはずだ。

現代のおやじのひとり、第四十四代竹本井筒太夫こと岡本勲さんは、葉局を営む。話しながら自然に浮かぶ穏やかな笑顔に温厚なお人柄が感じられる。浄瑠璃を始めたきっかけは「一度行けばええから」と親に言われ顔を出した浄瑠璃の会。場の流れで杯を交わしそのまま弟子入りすることに。

「今は好きでやってますが、はじめの

十年くらいは嫌で嫌で(笑)。でも昔のおやじは褒め上手だったので。やめようとする度、うまいことのせられて、結局続けてきました」と懐かしそうに話す。

これだけ浄瑠璃が盛んな地域である。当然のように若い人たちは皆この世界に憧れて入ってくるのかと思いきや、必ずしもそうではなく、後継者獲得には若苦戦している。とはいえ、岡本さんがそうであったように、はじめはあまり積極的な参加でなかったとしても、稽古を続けるうちに芸の魅力に目覚め、熱中していく人が多いという。



子ども浄瑠璃「鹿角座パンピチーム」の姉妹。三味線、語り、人形、囃子まで子どもたちだけで構成されている。



(上)オリジナル作品「閃光はなび ～刻の向こうがわ～」に登場する宇宙人ハセ。(下)6月能勢浄るり月間の定期公演は、いつもほぼ満席の大盛況だ。

浄るりシアターの運営方針は、地域内での活性化と

その点、ビジュアル表現は有利である。現代日本人はもちろん、外国人にも言語を超えた感動が伝わる。観る者と演じる者との関係性が多様化している現代は、確かにビジュアルの時代と言えるだろう。私たちは目で見る人形芝居の面白さを足がかりに、より容易に浄瑠璃に親しむ事が出来る。

浄るりシアターは建設当時、多目的文化ホールとして計画を進められていた。しかし、現館長松田氏ら、立ち上げに携わった当時の運営スタッフは、「ハコものを完成させることが目的でなく、それをどう地域の為に活かすかこそが重要だ」との考えから運営内容

を徹底的に協議し、結果、広く浅く何にでも対応できる「多目的」という無難なコンセプトではなく、能勢の文化的風土に根ざした浄瑠璃に的を絞ることを選んだ。「何でもあります何でも出来ます」という都会の百貨店方式を中途半端に真似てもダメだ。他所と同じ事をしてい



浄るりシアターの周辺ではためく幟。



楽屋口の「着到板」。座員の出席状態がひと目でわかる。

は年三十回にも及ぶ。なぜ人形なのか？ その問いにシアター館長の松田正弘氏はこう答えた。「ビジュアルの時代だからです」古典芸能をより広く一般の人々に親しんでもらうにはどうすれば良いか？

浄瑠璃の語りが使われる言葉は現代人にはとつきにくい。ある程度知識を持った人であれば楽しめる舞台も、我々多くの一般人にとつては話の流れはおろか、セリフの意味さえ理解できないことがままある。



語りと三味線は袴、囃子と主役級の人形の主遣いは紋付袴、それ以外の人形遣いは黒衣姿に着替える。衣裳には鹿角座の紋が入っている。

人形や役者を伴わず、語りだけで聞かせる最もシンプルなスタイルの浄瑠璃を素浄瑠璃という。文化年間の初代竹本文太夫の時代から、能勢の人々の間で受け継がれてきたのは基本的に素浄瑠璃だが、十五年前この流れに新たな展開が加わった。地域住民による人形浄瑠璃の上演である。

地域文化の振興を担う施設として、一九九三年、「浄るりシアター」が町に建設された。五年後の一九九八年に、この施設の運営企画として住民参加型のプロジェクト、「ザ・能勢人形浄瑠璃」がスタートした。太夫以外に三味線、囃子、人形遣いなど、一般公募で集められた出演者は、ほとんど全員が未経験者。さらに二〇〇六年には、住民による人形浄瑠璃の芝居一座、鹿角座の旗揚げへと発展する。

そのひとつの答えがビジュアル面での魅力を強化することだった。



終演後の打ち上げ。鹿角座の座員は現在60名(うち、パンピチーム21名)。



こども浄瑠璃による「伊達娘恋緋鹿子 一火の見櫓の段」。人形も子ども用に特注した。

一方、舞台芸術は物理的な制約ゆえ、描き出すイメージを鑑賞者の想像力にゆだねる部分があるが、観る者の内面で世界観は無限に広がる。



(上)人形浄瑠璃に用いる道具類を製作・販売する「伝統文化の黒衣隊」メンバー。能勢町商工会青年部時代からの仲間同士だ。(下)地元の伝統工芸である欄間や祭礼具製造の技術を活かした見台。

能勢浄瑠璃の歴史と地続きに立つ、第四十四代竹本井筒太夫の姿がそこにはあった。
二十一世紀の文明社会における古典芸能の存在意義は、決して伝統文化の保存だけではないと松田館長は考える。舞台には会場の空気に身を置かなければ感じ得ないライブの喜びがある。CGや3Dといった最新の映像技術は、どのようなイメージも具現化できるが、それらは目に見えるものが表現の全てである。

撮影・文 桑田瑞穂

浄瑠璃の里を訪ねて私が出会ったのは、単に古いものを大切に保存する人々ではなかった。先人達の遺したものを受け継ぎながら、自分たちもまた日々新たに文化を生み出していく地域文化の創造者だ。二百年前の太夫が歴史として今日語られていることと同じように、現代の能勢の人々もまた、二百年後に歴史の中で語られるのだろうか。

(右)終演後、人形とともに鹿角座の座員たちが観客を見送る。(中)オリジナル作品「能勢三番叟」。能勢の風物が織り込まれている。(左)「絵本太功記 一尼が崎の段」で太夫を務める井筒太夫。



同時に、外へ向けたアピールの意識も強い。
町をあげての浄瑠璃公演自体も独特だが、古典演目の上演とは別に、脚本、人形、衣裳に至るまで、言葉どおりすべてオリジナルの演目も手がけている。そのこだわりは半端端ではない。現代の女優の顔をモデルに人形の首をデザインしたかと思えば、衣裳にはインドの更紗を使用、はてはストーリーに宇宙人が登場するなど、オリジナルの度合いも突き抜けたものだ。
浄瑠璃シアターで、鹿角座の六月公演を鑑賞した。その日の太夫のト리는、前日に話を伺った井筒太夫の岡本さんだった。圧倒的な声量でうなり、叫び、激しく謡い上げる表情に、インタビュ어의時の温厚な紳士の面影はない。想像力を刺激するパンチのきいたロックな語りに私はすっかり魅了され、何枚もシャッターをきった。二百年に及ぶ